



行事アラカルト

◆ 新入生ガイダンス&歓迎パーティー 4月8日 ◆



36名の新入留学生(学部、大学院)および新入外国人研究生7名を迎え、国際交流室においてガイダンスを行いました。その後、本部構内の「カンフォーラ」にて、歓迎パーティーを開催しました。桜は咲いていましたが、まだ少し肌寒い中、遠藤研究科長、縄田副研究科長、近藤国際交流委員長、本部国際交流センター長・副理事の森教授をはじめ多くの教員、職員、在学中の留学生など総数100名近くの方々にお集まりいただきました。新入留学生の自己紹介などを交え、楽しい交流会となりました。

◆ 前期日帰り見学会 6月3日 ◆



滋賀県信楽陶芸工房、農業水利施設(野洲川ダム、石部頭首工、ため池)、水田灌漑現場などを訪れました。参加者は39名でした。午前中は陶芸工房で陶芸家のお話を伺った後、登り窯などを見学しました。午後は地域環境科学専攻の教員ならびに滋賀県職員の方に、野洲川の上流から下流まで水利施設を詳しく解説していただきながら見学しました。留学生には、日本の農業用水の供給システムを理解する上で大いに参考になったことと思います。



◆ サッカー大会&ビアパーティー 6月26日 ◆



雨の中各国から116名、8チームの選手たちが集まり、ワールドカップさながらの熱戦が繰り広げられました。優勝は発酵チーム、2位はベトナムチーム、3位は内モンゴルチームと中国チームでした。泥だらけになりながらも、大きなけがもなく、国境を越えてみんなでサッカー大会で盛り上がったことは学生時代の良い思い出になることでしょう。大会審判や準備をお手伝いいただいた先生方、職員の方、運営を手伝ってくれた学生さん、サッカー部の皆さん、雨の中応援に駆けつけてくれた皆さん、大変有り難うございました。皆さんのおかげで素晴らしい大会となりました。

◆ 研修旅行 9月7日・8日 ◆



一泊二日で丹後方面へ出かけました。台風9号の影響も心配されましたが、大した影響もなく無事終了しました。1日目は天橋立や伊根舟屋の美しい風景を楽しみ、夜は「海と星の見える丘公園」のロッジで全員参加のBBQを通して、普段は知り合うことの少ない他国の留学生と親睦を深め、大いに盛り上がりました。2日目の午前中は京大舞鶴水産実験所を訪問し、益田准教授のレクチャーを受けた後、実験施設を見せていただきました。クラゲと魚の研究などとても興味深いものでした。午後は関西電力「エル・パーク・おおい」を訪問しました。説明の後、実際の発電所を見学させていただき、その威容に圧倒されるとともに、多くの方の努力により初めて電力の安定供給が実現していることを知り、大変勉強になりました。ご協力いただいた皆様、大変有り難うございました。留学生の皆さんも口々に、楽しくて有意義な研修旅行だったと喜んでいました。

◆ 2010年度の後期行事予定 ◆

■ 後期新入生ガイダンス

日時:10月5日(火) 16:00-17:00
場所:国際交流室(農学部総合館S-131室)

■ 第4回 ほっこりカフェ

演者:Mr. Javier E. M. Moscoso(生物資源経済学専攻M1)
日時:11月10日(水) 15:30-17:00
場所:森林科学専攻会議室(農学部総合館S-130室)
演題:A short description of Bolivia and its people(ボリビアの国と人々)

■ 後期日帰り見学会

日時:12月10日(金) 8:30-18:30
場所:和歌山県有田郡
内容:有田ミカン選果場の見学

■ 第4回餅つき大会(予定)

日時:1月中旬-下旬
場所:農学部2号館東側

発行 京都市左京区北白川追分町
京都大学 農学研究科・農学部国際交流室
電話 (075) 753-6320,6298 e-mail: fsao@kais.kyoto-u.ac.jp
*本News Letterのバックナンバーをホームページに掲載しています。http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

印刷 京都府京都市南区東九条南石田町1番地
朝陽堂印刷株式会社 電話 (075) 681-5331

News Letter

International Exchange Section in Agriculture http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/

留学の機会

二井一禎
[農学研究科教授]
[地域環境科学専攻]

私は39歳になって、ようやく留学の機会を得た。昨今の傾向からすれば、ずいぶん遅い機会であった。家族連れでの1年間のカナダでの生活はこれまでの私の人生で最もゆとりある、みのり豊かな時間であった事は間違いない。それまでも留学の機会が無かったわけではない。学位を取り、その学位論文を御送りしたオーストラリアの著名な線虫学者から、留学のお誘いを受けたことがある。当時まだ職にも就いていなかったため、生活が安定せず、帰国後にアルバイトの口を失うことを恐れて、折角の好機を逃してしまった。多くの線虫研究者から「またとない貴重な機会をどうして利用しなかったのか」と惜まれた。何もその事が分かっていなかったわけではない。アルバイトの事、病身の母の病院送迎のこと、など躊躇せざるを得ない理由があった。最近の若者について、留学志向が減っていると批判が出ているが、現況の不景気で就職が極端に難しくなり、かろうじて就いている時限付きのポストクの職などに在る者にとっては、なかなか留学に踏み切れないのは仕方ないと同情する。若者にばかり批判を浴びせる大人達は彼らの置かれている状況にも少し理解を寄せる必要がある。

さて、私の話。次の機会は合衆国のミズリー大学への留学のお誘いで、これは森林総合研究所の研究者が用意してくださった。マツ枯れの研究者を一人共同研究者にというお話であったが、土壇場で先方の条件が変わったためにキャンセルされた。そして、三度目の正直がカナダの森林研究所への留学の話である。ようやく巡って来たという思いや、遅すぎる留学であるという自覚から、1年の留学をできるだけ充実したものにしてしようと考えた。広いオフィスを一室与えられ、コンピューターと顕微鏡が備えられていたので、その気になれば一日中この部屋に籠って勉強三昧も可能であった。しかし、実験や研究のほうは、教わる事よりもむしろ教える事が必要な立場であったから、マイペースで仕事を進められる。それならば、オフィスを出て、できるだけ多くの人たちと交流しようと努力した。下手な英語に尻込みしがちな自分に鞭をうち、研究所の多くの人といろいろな機会に様々な交流を試みた。20年以上もの歳月が経ち、多くの知人がリタイアしたが、今も何人かの人たちと交流がある。

帰国後、この留学で得た経験を活かさねばと考えた。一つは自ら国際学会への参加を積極的に試みる事。ポスターセッションではなく、必ずオーラルセッションにチャレンジする事。できれば、座長を務めたり、オーガナイザーを務める事。英語は下手でも、多くの人と知り合いになれるのがその理由。他の一つはできるだけ多くの外国研究者を招いて学生諸君に、「ガイジン」と「エイゴ」という国際化への垣根を取り除く事。そのためもあって様々な国から外国人研究者

を研究室に招いた。長い人で2年間。短くとも3ヶ月。ほんの一時的に立ち寄った人まで含めると結構な数になる。留学生も遅ればせながら何人かお世話している。彼らの苦勞をできるだけ理解し、日本での生活を充実したものにしてあげたいと思う。さらに、大学人として留学生のための奨学金受給候補者を選抜するための面接委員としても多くの留学生諸君と接してきた。留学にあこがれ、その機会を最大限に活かそうという聡明で意欲溢れた若者が多い。どの若者にも等しく機会が与えられれば良いのにと。それもこれも、自分が留学中にお世話になったカナダの友人達の親切への国際的な返礼であると考えている。

ところで、留学をする事の意義は何なのだろうか。留学をして金を稼げた時代があったとか。もちろん、それを目的に留学する人があるとは信じたくない。次は留学中に仕事に精出し、業績を稼いだ人。普通研究者の間ではこのような若者が讃えられる。しかし、もしそのような若者が、留学先で人と交流せず、その国の文化や芸術に触れる機会も無いまま仕事に熱中していたとしたら、やはり何故留学の道を選んだのかと問わざるを得ない。もし、留学に意義を見出すとするなら、もちろんその事によって研究や実験が飛躍的に向上する事が望ましいのだが、むしろ多くの人と交流の機会を持つことにこそ意義をみつけたい。そして、その事を通して、自分が興味を持ち、日夜取り組んでいるテーマについて、遠く離れた外国で、言葉も、肌の色も異なる多くの人たちが共通の興味を持ち、真剣に取り組んでいる姿に接する事にこそ真の意義があるのではないかと。研究はともすれば孤独な作業の繰り返しであるが、世界中で多くの人たちが同じ問題に取り組んでいることを思えばこんな楽しい事はない。留学の機会はその「ガイコク」の研究者が実は自分と変わらぬ悩みを抱える普通の人であることを知る機会でもあるのだ。



来訪外国研究者もまじえたゼミの後で二井研究室(筆者:前列右から2人目)

